

事業成果報告書

1. 個人または団体名(団体名の場合は代表者名も記入)
団体名： 日本軍性暴力パネル展実行委員会 (代表者名：池田恵理子、石田米子)
2. 研究または活動のテーマ(課題名)
国際シンポジウム《大娘たちの戦争と記憶～中国で性暴力パネル展を開催して～》 の開催、および本シンポジウムへの中国からの講師の招へい
3. 助成額
¥240,000円
4. 実施期間
2012年11月9日～2012年11月13日
5. 実施状況
2011年12月 パネル展実行委員会 (以後実行委員会) 2012年夏以後に本国際シンポジウムの開催を決定。招聘する候補を屈雅君陝西師範大学文学部教授・同大学女性研究センター主任・同大学婦女文化博物館館長と決め、連絡を開始。
2012年5月27日 実行委員会 シンポジウム開催を11月11日、屈教授の招へい期間を11月9日～13日と決定。会場の選定、予算の策定等。
7月20日 実行委員会 シンポジウム開催を知らせるチラシ原稿の確定。 日本女性学会による屈教授の講演を11月10日と決定。
9月18日 実行委員会 チラシの配布状況の確認。 11日当日の発言者の決定と時間配分を決定。
10月17日 実行委員会 事前準備(横断幕、看板、設営等)。 当日担当(司会・受付・記録)確認。11月9日出迎え等のアテンド確認。
11月9日 午後；屈教授来日 成田に出迎え 飯田橋、後楽賓館に宿泊(4泊)
11月10日 午前；実行委員会との打合せ 午後；立正大学大崎キャンパスにて 日本女性学会主催、日本軍性暴力パネル展実行委員会協力 研究会『中国のフェミニストに聞く』開催 屈雅君教授講演 「現代中国における三種の女性話語(ディスコース)」

コメンテーター 金井淑子立正大学教授（日本女性学会）

質疑

11月11日 午後；日本大学文理学部 オーバルホールにて

日本軍性暴力パネル展実行委員会主催

国際シンポジウム

「大娘たちの戦争と記憶—中国で性暴力パネル展を開催して—」

プログラム

①シンポジウムのために編集したビデオ『中国でのパネル展の歩み』上映

②屈雅君教授講演「女性・平和・民族自省—陝西師範大学での開催から考える—」

③リレートーク 鄭宏娜（北京第二外国語学院院生。特に来日）、山下芙美子（ハイナンNET＝海南島の被害女性への支援団体）、小浜正子（日本大学教授、中国女性史研究会）のショート・スピーチ

④質疑応答

終了後実行委員会メンバーと交流夕食会

11月12日 都内観光

11月13日 午前；アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」(wam)へ開催中の特別パネル展『軍隊は女性を守らない—沖縄の日本軍慰安所と米軍性暴力—』を見学後、同館スタッフおよび日本軍性暴力パネル展実行委員会メンバーと交流。

午後 成田から帰国

6. 事業成果と自己評価

日本がアジア太平洋戦争で引き起こした女性たちへ性暴力は、女性一人ひとりの人権の問題として取り上げられ解決されることなく半世紀にわたって放置されてきた。その実態と被害女性たちの勇気ある訴えは国際的にも大きな関心を引き起こしながら、被害女性たち、とりわけ中国の被害女性たちは、自らの属する国家と社会の公の支援を受けることが最も少なく、被害女性とその家族・遺族は今も生きにくい社会的環境の中にある。過去5年間、私たちは実行委員会を立ち上げて「日本軍性暴力パネル展」を中国で開催する活動を行い、ようやく戦時性暴力と被害女性の尊厳回復の問題の重要性について共通の認識を持つ中国のフェミニストの研究者たち、学生・院生たちと出会うことができた。

本国際シンポジウム開催という事業計画は、私たちのこの活動の歩みを日本社会の中でより多くの人と共有することに役立ち、中国フェミニストと若者の近年の意識変化とその背景の中での戦時性暴力被害女性の問題との出会いを具体的に知るといって非常に大きな意味を持った。こうした試みはこれまでになかったことであり、屈雅君教授を招へいしての国際シンポジウムと日本女性学会研究会の内容は、いずれも非常に新鮮で充実したもの

であった。

この実施期間において実施にかかわった者、参加した誰もが、内容の濃さと斬新さを高く評価して下さった。国際シンポジウムと日本女性学会研究会の二つの講演の内容、これにかかわる報告・評論、この事業計画のために制作された記録ビデオ等は、今後発表され、共有されて行くはずである^{註)}。日本のマス・メディアはこの事業を取り上げなかったが、中国のメディアは大小 30 社以上がネット上にこの日の内容を掲載した。

注) 講演原稿の日本語訳について

「現代中国における三種の女性ディスコース」は、日本女性学会機関誌『女性学』20号(3月)に、「平和・女性・民族自省」は、『中国女性史研究』22号(2月)に掲載した。

長年の調査・研究・活動にもとづいて今回の事業が成功し、今後の展開に希望が持てたこと、貴基金の目的とされる「ジェンダー正義の達成」「女性のエンパワメント」「女性へのサポート」を目指す活動の一つともなりえたことを、私たちは自ら高く評価し、貴基金の助成に深く感謝している。